木枕　全

木枕　全　全

全

へ 13
2776

伊 2776

木枕序

忠言耳に逆ふ習なれば此言の葉を見聞
人ハ必耳痛く思ふへし故に木枕と名付たり悪を
見る人ハ人の鏡として其心をみがくへし有る悪を
補ふ人ハ一生悪を守る事稀に陥ひ悪を遂る前
車の覆るを後車の戒後の人ハ是を見る者慎まんハ示
後乃人ハ半してかすし海云免んと云之

へ13
2776

西山公仁政之事　付 熊沢了介退去之叓

夫有為濁世の習ひ未寛恕せる天人とも衆生のがれ
ぬことなし皆是聞て専ら海の内にまよひハ鹿苑の
比人こそ此時の要のみ之モなく政道を行く業を改め
大相国源の一家康公天下を掌に納め給ひて仁政を
施さセおはしますセハ扣徳て天下安静之御子孫にお
し海内且を寛仁の是給ひに序中にも鹿苑の法
ハ天下の政總として仁二の道を進めさせ給ひて大納言
義直公とぞ申されし家神仁乃二尽せても致させ給ふ文

武の家なれバ何か思ひて武士を捨武を嫌ふ名将の誉に
什せ給ひける深く偽をも好せ給ねバ解の古悔もなく忠
に死を重せさる故なれバ冬の山海とひとしく制法厳重よ
して豊臣の世に其昇に仁政にして民常に安し天下の為ま
呉国の周公に等しと誉ありける其の諸将も此君の為に
法とめでざるハなかりける近世乃人ハ見利し者後の首も
及ても如何成家ならに仕へ奉り身命を捨て忠義を励ミ人こ
そ本様なれバとて義を偏ぬハなかりし猶に増て武儀乃ゆ
乃蒼氏等ハ家君の寛仁大度にふかく仰せハ漢家乃由

百年も経てや兵乱万業と称し先祖の社を法に遠からず
まりけるに是ひも慶安三年六月七日　西桐ノ木
御手も嘆けりし世をさり居を他界に移させ給ひしかバ
諸卒万民に至迄闇夜に灯火を失ひ日を失ふがごとく
途に迷ひ世を忘し兵何とされ果た有様なり旧恩を感ぜ
諸人ハ悲嘆の涙の下に殉死の此供申も有り或ハ定業
必死の御命に何ぞらんバ家兵卒ともませんとこれに何ぞ
て思ふも有り下万民は君におくれ奉り又いにしえの世にかへらん
思ひ氏の御代にもどさべしとて他に起仰でござみたる鏡ハあ

まさに御代もめでたく候得ばすこし浦しさきには彼者も飛澤有之
御武設を遂られ武勇芳名家に伝ん武臣なればこそ上には王室を
安泰にすぐし下には国土を豊寧にあるも
んなりそれらの諸事を相ひ万民を助け貴ん事を思ひ
今の世に至まで昼夜寒暑に精神を尽し勝を席に付
根をもとも流派を海にし国家文武を従ひ相續が家に
世に伝はることしられぬ者もなかりけり上にも甚だ重し
流とも社めでたく候ひし処に此飛澤有文不存證合に
志て年去せられ候まには諸人前是に年を居しこれ在

いかなる世のあさましきとも後いかなりとも忠臣たるべき御国の
道をとうかくもせずとほふみおもひ残す

吉水早懸由緒之事

さればば社家の者共も見くまに流派飛澤が事をも
また後のみ人々は武臣に伝ひ国政を身に委ねべきこと
諸人へも申すして是を感じ万事耳を傾けて是を聞に
早懸有社当内知識の者どもへあれば方法道を伝ふ事は流を
叶へられば忠義深く人には年を儀竜吟虎嘯吉事を施し
案議の人は意を察して道を伸でこび請早懸有る名跡

文も無武もなく仁もなく義も無悪心飽迄深くして蟠媾惡
よなかりし平家の背を一撃に成まで思ひ伺居竹藤山鳩可
成朝臣へ金をも讒（ハリタガル）の為なく正して他に讓ルの礼もなく金の
徒まで振舞ふ家臣を捕（カラ）め郎を擾し武士をしや太閤杯
兄弟に対し人敬ひに之し有毎さ并子ミ天理父子社家
死をもたらしける下言小朝臣恩ニ之天理父子を討早鹿苟
に訴へて屍ル自由を上させ乞兄弟ハ猶病者とぞせ兄弟
成朝臣なる哉公への旨を以て八眉を皺（ヒソメ）悪を見て八眉を
被く山叢の首なれハ成朝臣荒の身へ正法名一兵に天理

儀
父子を晩し兄弟共一兵罪（タン）ヲ見て偏視（ヘンシ）の事ふ人へなれバ是ふ
を存として天理父子理非死明の次第ても不及沙汰後を以て
是物を見ル家臣抜の天路天理心に思ふ哉れつれづ此社是非新
いたづらに捨得とも魂魄ハ必嗔恚（シンイ）の悪鬼と成て是へバ
菅相公ハ荒人神に成なりし悪ミ深き義年新田義貞も雷
となり憤りを散せし之家ハ失せ社是被の跡に
ハ蜜ましと歯を食しばり手を握って死ルけり之を見
の眼を存侵く社早鳴るが鉄よハ毎く涙をかなしきを見
を秘して是非を云された新門殿に入ル悪傷の下身を流

はとを尋ねけれは又三月二日に秘蔵の鷹にうちまたせて豊前が
館の辺りをかりあるきひとしく見けれは其の時分毎度
に甲斐の国の住人摂津守岳浅々見せし御書の状をそ見給
御出の武州へ下向そのとき時節至りて見参るの事あり御目
見に社頭におはしましたりける甲斐の国が頼みし者着たる月にかゝらん人ま
しを見せて御目にかゝらんとの事にまかせ給ひみおはし
然は岳浅と社人の目に見えしは其の方へ出入し給ひて出る
人なりける所にて参りける甲斐の国武州へ下りまかりける
るは息明寒物をそ之ありけれは三所に住みける人種等を

後死にかうむりし三寸舌唯の罪にのて以て今明寒千歳
海して死する又福徳の山に狩りしこそ名をも甲斐の国が妹
もち人の死後は是偏に天理父子が過怠と覚えける甲斐の国が
子孫子代までも敵殺と見る所に在るを以てこそ死一生と
覚え取られ祈神三宝に祈誓しまする事にそれは聊か其の変
のこりけるとそ一岳文殊三病付おはしましけるは辛苦せられける
城取ると又兵衛男をそひて身痛辛苦に成りぬ中に病追文
日本一の猛病の名残して飯追殺に行ひしこそ社中と死
たる方は大将方にあらはるゝ人皆言ひけると之

老中の心得

亦ハ諸人ニ政の要ニ当りし人ハ必ずと老人ニ云ず此れ
竹腰成る機根成れ共て其心自然ある人の器量を
若年なり共不入とせずして吉とされバ其心益ヶ好ヶれハ
器量ハ不可成候人ニハ鈍性無器量之至人無器量なれバ
家人必驕りひきれバ大竹水泄るが如くと云ふ人ハ制さする
人なきぬけ人ありハ政の事ハ法る事不及候也
社首條々目来老臣のまま支配を叁て武勇戦功の威
を振て云及の其参を家之徳人て不孫末繁れ云ふ

然ル不乱の儀を偏ぞての事務ハ社稷ノ領をと十月も
先をも二十年も先を推して云ハ九月ハ年若しの八ヶ勇意
頂則ニあて秘用を知らざる人ありバ叶難し惜ら事なれ
退とて諸人ハ是ぞ惜る者の伴ふ自の驕に無絶の
雖も要ハ専和正路ニして以て然も右に所しからず時ニ
合ぬ歟也ハ驕られん知咸退て也と者られん病と称し
て退る雲風ハ伏竄驕驕翱翔なと首も人の云ふ意なり
尾を侍る生付差悪ハ西東まして主君の為ニ功を思ハ法学
の為ニ而を政人ニ有れ此事年ふ候はバ世を何もずして

されば何とも只此等の理なりして悪しき人を友とすれば根
性も悪しくなりて善人を見ても嫌ひて遠ざかりて大事を
失ふものなり只行儀作法を振舞ひ好き人に見習ひ学ぶべき
物なれ共其身に能く学ぶべしと覚へ只然るに学べる事さへ根性細
く愚なる者は愚痴にして小びて古人の余りをも身に得て
人の跟を望む心なれば叶ふべき物は無し広く人を
と云人の能人と云者なきものなり世の中に無き
事ならん集りて談話したる人ども其文言を見るも書
子擇むと云ふ事は人の言ふ事を能く思ひ得るべき例も知ぬは如来

好めば見ることこそ見てよきものと云ふ
白梅に此下文に主好賢則賢人来る好佞則
佞至る良将の下に弱兵なしと世に千里馬は少なけれ
ランと見知れ何ぞ求むる例下に数十言友として至る一人
暴する事を云ふ事逆に由るに故略して以下も略する例傚
是
成敗豊之論争遂に非
理も分らぬ人の言ふ事を取り聞いて耳を分けず着る事に随ふ道
は危きなりとぞ申し候それば彼の将軍の中の家にて

所地を見分る限り至て名字を猿楽ハ徳君を法度
にはそ免て奴隷を蔵ると云し社奴なるを羅にまて罷る
も地は自分びとぬ華未にあらり仏家豊前なる家老とて
村隷なると云者有り或は彼なる当時く出れる仏家れ
荒宗の商人事り仏家が此ハなんを法しくと見居にて
家に此人めを成仁をなるとなく法ハ見社村隷なり
と云て奴隷寺なるとしも秘密せまし家を成とぞ
中仏家宗の者党を受て何なくべしや此法の段豊前なる
元行見んはあずらハよう家へことぞ節なる至真なれ

てる度問候ハさ法が田舎人多き人ハ必ず是をなるを以て
ある心を知るを人ゑなく心有頂天とも量知ぬ驕りの
是を豊せし豊前能ある事とする人よ社倍し猶字とハ
何事やしと云なれハ近き今の家老を忘れんと云捨て去り
奴宗の者の兄家自ハ驕家と社党人なる豊前なる異る党
にれるさる寺社領し仏の元弘乃古人言氏将軍の
弱にはよるの障もなく社寺下家来の驕者されば武勇ハ党
にある候その豊前なる驕ハ障をよるなくて武勇ハ党にて
知らざりき上ハ至君を欺き事り得家法の掟るなをとして

是ゟ下ハ万民の難儀なるを知ずして陣家を造りけるハ今
殿主楼に甍（イラカ）を並べ八重堀十重堀に屋作りしても君乃
材木検使をバ心の侭に流しかけ幾千万の金銀を
ぬすみしかバ加之（シカノミナラズ）是も御当家元祖伊勢の前将軍家康
公御手自（ツカラ）の縄張にて御城の要害を極め今も其居の上に
自分ハ其事にて枝知ら難ふくも其ゟ雑に生年の御家の
繁昌をも考へざる当諸ざる諸人へ沙汰し樹木を切らせ不残を残れ
て舎宅の私用に使ひしハ買か不知と覚へたる事を取よ
寺を壊し神社の是を打て大木を切取て民の困窮

不顧民を運送させしむる事有鍛冶石切塗師鋳物
絵師張付師蒔絵師木の諸職人々是日用に至迄日夜に
かゝる云あへし諸人へ價をやらざれハ皆困窮に及べる諸
町に於ての買物の價をもやらぬ者ハいつとても云へる数多し
剰へ御城ゟ里半ばかり石井（井）村の田地に雇ひとて土龍（イチ）
河を掘へ小山河三社の御神に障りて其地ハ昔
大相国か下ト藤原竹原家塩場也其後所有て
農人耕作者の畑地一里斗も奪ひとり其下斗の横に井
まハ鴨を築く堀を掘して橋をかけ水を堰入て舟を浮べ楼を

並て罰せらる土井村の民共ハ耕耘を草葉の地をも遠さ
旱魃(カンバツ)困窮し農人畠を荒さるれハ溜合に社及び三社の
此郷徒に追ひおし奉り数十杖の陶宅ハ金銀を鏤(チリバメ)て陳ね
世の人ぐ奉さ商賈東聞に旅僕し人馬の横乗起に至て
く盛しに隊

同農業驕る之文

別て農業の心に任せぬるも農具にも合ぬ事も有可
猶に長じ往て家に親む者なきがさして忠功なき人
町家の他に郡七切米の増え扶中にさもて与(アタヘ)ん往て家に

諂ふ者にハ農業の人にても諂ひて名付け職かたて家
業の勤る上下まで人々ぞ人々も農ハ徐々にせざし者も何か
根に我人々も其ら上方への勝手横道へハ其何も其の世
在あるべきなし追て淫落せしむるや其他に奢侈せん人ハ
衣服を華美に鵜見え勝をえて遊なる事も此等の無益にハ
馬に物能長方代の者共村里下地も何かハありなん矣
有人く美しきハ絶んなれ田舎の田養家の間の何しそ精進
乃間人分らん目見べせんと思ひ迷て相へたりける者
出合ふればハ鼻の此こめらして者たちが気

立てぞ有りける天楽の曲に漢のかくしくいとしく臙（ヒゾメ）
めしれ所に入れて飲をもてむかる衣は将其例の如くにて
嵐烈しく浅茅原靡く茅葉にて頻驕豊かに鞘
與も煙霞せしては樹る猿もそ伸く薪を燒ずてたて
昨日今日越方の家兄の館も不乱所の所来たりし好
宮豊前官兄人何その爆り不知は億名無人とみえずに
候智鬼が別の中にて八百て有りし人今は大孫人お
上君れはなり居て都しく彼の衣は御所変見る雅に
宮や館の連葉のさくしと御上ては何の分かちなき事ぞ

れ君の家社おしなれ弦人今振当ひ給ふ家を服
有りしまのゝ有しく人此の奇物珍財共に今も柿蔵の下に
取散し柿ねは家をは日々夜とよ陰も有り或は庭
蔵の庭をとられ或は庭の塵をも掃石をゆりまく樹を植
て茶履をさして藤をめき膝り近旅も家継は都にて
人はさまたり其お守待受て機嫌は何んてひしと絶えし
八十余人と見へけり弓馬の家は今も法く古跡の者共が
斯近取も柿のよて在れあかく家人を八何の国に立へき
と見せし鬼人の地は少り逃てぞ覚へけり

旅人[illegible]のこと

人々たまし雅ハ当世并雅の也之田舎思[illegible]なる石川内
藤小町小出新兵衛也豊前守始として雅に志ある小留
初たる者数多ありて聞へしは金銀珍宝錦で身付し
着たるは大田[illegible]兵衛 代官 中田久兵衛 上月 小笠京
村瀬平九郎 [illegible] 独[illegible]なり [illegible] 安[illegible]
[illegible] 平[illegible]也 [illegible] 枚[illegible]
[illegible]
有り[illegible]も[illegible]の[illegible]着[illegible]菓子[illegible]

たる退たこば数日に至りけり上方より商人に付て[illegible]
ぐり[illegible]おいて遊んで[illegible]は臭香蝿也[illegible]見ゆ
いるしと笑ひける世はるし[illegible]と[illegible]て[illegible]ける所まれ
ま[illegible]て[illegible]ける[illegible]り[illegible]と思ふ[illegible]の[illegible]とき
れる[illegible]はるし豊[illegible]を始として[illegible]の人の[illegible]は[illegible]
せさてまた[illegible]せられても[illegible]は[illegible]思ひ
[illegible]は[illegible]の[illegible]ん支[illegible]を[illegible]ひ[illegible]を[illegible]
[illegible]れて男子の[illegible]に[illegible]は[illegible]理の[illegible]迷ひ
[illegible]の[illegible]人は武士の[illegible]掲[illegible]は[illegible]

又名字をかへてけり首藤四郎が女房左衛門の妻に生み
といひし社世に憚りある人れむすめ社なかりけれ
髪をそりて九郎義経と名乗りし又川津が二男時
宗ハ小藤の時政を烏帽子親に頼て小藤時宗と名乗り
仁後その若侯ハ自ら名字を改め烏帽子親に名のり
いかなる故と存ずれバ若衆なる比ハ下部に忍ひ人
急き大名年経て梅の間して煙霞を尽せし絵にける
まじりん眸やうゑを合せる三の葉を頭にすまして心ばえ
て成香しく右衛門とて追踪顔のあはれハ蝿の手を摺て
るみくさ先の若侯ハ庭先の草むらを見通して兄の恩の
き此程の庭の草を境一麓庭の遠景ある山路池の汀の芝原
や三年の浪の根に落葉切株を絡めバめ見事なる
ひおと称りし離れありて若衆が方を上目に
し何ごろを目出すれハ御家列座の侍人皆も面白く
いとも見ゆれど誰も引こそ何ましさと若衆
が機嫌を繕ひて興ある気色にいさみける者も能と見えて
海して若衆を立て若衆ハ華々しく團子の菩薩を
桜の下に立ちて流し吹みし花の香吉れバ若ゞハ

て撰ハ、なべてまうるをあせると云ければ、実も執直の村よ
多くの貫を取者しまれいとそ形をて白着を踏ことす
候し淳ぬ泥ぬおしの家芋俸總統れ下卸し体ハ氷
せさらむる前をハ云須と大糀色配せよ菩着よハ稚痘
そ尻ぐせよ清着よハ鋤を擦へしなゝ人方よハあら
みせも白延せ来れか滅ハ合須へしとも只一人の下敷れめて
さ斗の人数者乳稚も不動年等れこそこかるへくと
飛追の英進て清ゐこありけく貴たりけり
豊前るを始として飽海せしと見へけれハ味方の兵ハ

家なりし婦人も河へ須来を云事未不覚えたさらて既に
しらを掛ても宮をせんとぞかきおくれける家もくとれくの
然れバ若俸に身一筋にてハ何をゝ内海おもて掛織ぬき
捨置れおきて委をぬして捨なりし流石名も怪数な島えて
菩薩切の花飾さへすらしれ皆尽しる祉旋しりけれ
連府の旅人打の流石希代の侍と巻く家人も多くさ文
候れたぶをてハ若俸ゝ宝物隙袋隙色をとハ未前稀え
又業の菩薩切をおかの小椎や友ぬるとたるまを丸笑人へ
有り此時分も停せずしてこそば切作えとハ名をたゝなり

發ハ往毎の池の堤より出て光儀の連りの事をぬきかく
る指磨せしむるを知る人の禮儀にて
西よりハ鳥ら深く岳城にて浮居を濃與出居の若侍
舎弟の理由が居を休息ハ曲町始まりて山桶と云小倉乃
ならしどうをおけし数多の勝をぬく在れ居を言
多く賞えて豊前勢が子息大膳を見る根の領し家銅
多くを持ちんとしるを考前が方へ持来ちらから流石ちゃ
ゆるも金前の兄家臣也 取發浪居の色来て門の扱まて
取扱ふと中せハ豊前文子を始として出勢のと

三郎ハ小姓衆並儀催ハ座上に並居て見物せんと
ひしめきける所にさて見んとせんと又見物おされハ諸人
淀源が家挨拶も出来で揉合赤飯ぬきさいしかり
上て振りけれ共見れの子路の石投ハ来遣りや湯取神事
の藤乃猿形橋弁慶の五条の人形もざいふりハ文ハ壹
形の生者に山伏の湯杖に三番叟の流の舞で上手なり
さけ小踊し扇音鉦ハ手をおてうへ七山桶のどう
ぜハなどやおぬと攻れバ鏡の溜ハ面かるみ海じめに
成て捌されハ猿へ皆をさまし須臾ハ猿へて見

此時余り笑止に存じ兼て豊前父子をよび寄せて法人
座敷を立此家が目鼻も見えず笑止さて仕ませ須相
ずに儀存仕やせで進退きはまりて何とて威光の角に相違
て通るがかく悔りしは面目ない事哉と見くらべ人のはれに
しこの家は殊更も地に落る豊前父子が前にもどらば
いかで尾籠の打奴の実は事にしやる事もなく理由
がたる奴勝義をはくされ恥や何とへりん山椒は人の理由
とは是かしも名付くるしが飾り雑はなきとて山椒理由
ともやれ此家が礼に彼此家絶に法人豊前を取し加増

御当家なれは豊前は法人をもてなし法へ金銀財宝を送り
勤職のものの家へ合せ笑ふ奴金を奢りけれ

威徳を手付怨心の事

大名高家は末世の風俗を見聞家来の発を戯ては
加増地をも得せねば政事の役相上て身を退れた有と
諸人是を誉れけりその威徳をまきて世の治世に任
せられたる加増地をも得らぬ貪欲飽足深くして恥をも知らぬ
者あればは空財身命は去ぬれた好む欲心深ければ厭く
断りも常に家内に加増地のれ新様をべきれ何も収え存

の終地に何ざれハ此役所ニて此所に住ハ動らぬ事なを
極を賜りて家業を経営させ諸人ニ敬ハせし八所作多
雅び合宅も経論せざるにハ其の政務に堪ざるを
其政居の要るよハ智恵の深さとぞ則の心爰ぞ八なかり
なり維令一所八か分に合宅ハ維墻にあらぬとも陣みる
発るぬれバ更に年経なれバ極け作るよりの大なるさ
よし明矢を限あし何所然に鈴領の尼公の信にも
仏祖ぞ言ひやう寂尼の果是月に霞之縁る頼に
無きむ光の法号く何かに残や流れるまを載る縁やまる

月を移うそうていまへのてさぶり方年としてしまへハ
成佛ぞ人の貴来の小児まで及ふ此を逆修の列にて安置ん
終ひ佐く本仏の他みぞ離らぬ万事其の貴かれ　西相公
は他界の作供をせず遂にこそ諸人爰をかり上節ニか節も
に死哭に死ざれハ往病者とてぞひ更になりして八節
面に映れ其蛙の水を酒き庫の角蛉の縁ぞ作く終れて
へぬ往人こそ魂を招れ八倉葬人らしぬにハ諸人の手空
せ茂の欺きかし理無音路を押し本をしりて
とて人家救さあし憩に其限を哲身ぬれハ政務の位を

指上て如此猿与力数度さし寄て渡る猿と云獣ハ
老て後頭の毛長く生ル是ハ項毛に続きぬ退時ハ
尾を越て引返る者それと云ふ百年豊葦原の男も退兎
ハ鼻毛も伸まつきぬ退ぞかんと擬する者ハおかしき取りと
云これらを見て進退窮まりて詮方なくしてあちぬ
事ハろう年老ぬる又ハ猿退ぬと共に限まず事ニ入
清むハ名の上之嗜むへきハ貧兵者なりと云て
白云此下貪慾ハ臆病之人なる論戦場ニても用ニ
ミナ当時以世親子兄弟も貪慾ニ天下ミダリ能今

豊葦原戦場ニテノ百年ミダリ此誹諧容也
シナトト蜉蝣十二三ナリ是也
誹謗人之支
屈原が云世ハ皆濁れり我独り清めり衆人皆酔へり我独
醒めりとよひし[illegible]ぬ清き[illegible]と
示[illegible]と聞へ[illegible]誹しと云ひ[illegible]
如来指上て流浪の身と成れし人之[illegible]
[illegible]なりたり[illegible]
ミ[illegible]し[illegible]人世ハ擬の[illegible]老人ハ放

なき一ハ生老病死の四ツとて老を迎るなきなし病を
さく深きをまし として云々

白云此下隠逸之貧家ノ景状茅枯地ヲ述也遁ニ
千態万状ヲ述シ畧ス仍ニ所ゝ脱簡モ有也

賤人ニ交ル付大将之事

狂人を見るハ増る狂人と見くれり人を能く欺ハ狐狸
乎とぞへたり諂曲（トツキヨク／ヘツラウ）を成者ハ奸邪の心と知れたり豊前
ハ賤を見まし深ハ是を知れ増賤之者ハ豊前を欺き猟まと狐
狸猫乎の言語之是を知れ猶曲を成者ハ奸曲邪の至哉

こはくての身にて豊前を包んで亡さんとなす有夫是を
さんと云又神是を亡さんと云ふ何の実也舞は深りの人
しらぬと云て

白云此下和漢ニ嬌奢テ諫ニ不従モテ亡ニ者ノ
数ヘ挙タリ畧ス

大将賤人ニ交

豊前賤ト蹲こゝ路を遊んに但も之君へ古悪霰ホ
古ハ類逸れ当座を果さし百姓ホ社中をまかり家
柄と民も慶き嘆き久家然れ侍ゟ文章子にあて史を

されバ万姓をまもる天下の君ハ天下の人の心を察し一家
の主人ハ一家の者乃心を知るよし云く
白云此下君ハ臣ノ心ヲ知ル者ナレハ吾好ム処ニヨツテ
賢臣モ佞臣モ有リ人ヲ不知シテ用ユルハ国ヲ亡シ
家ヲ破ルト数十言アリ略之

諸人首を慕ふ事

昔ハ武家世の中乃変乃乱れ始り行ハ貴きも賤も無しむ
てぞ有りさこ民の百姓の段乃擾にて孫人恨を安ける処
に就ても　西相公御在世の時ハ御威光の徳にして
殺せり徳義自然に厚くれハ万民のたのしきをもさるう
廣しても世もおのだつ寛裕之豊にきみ家上なれバ下ハ
孫安りさこその世れ至てハ上ハ僻て窮しけれバ下ハ益
国こなり世も諂ると覚ゆれハ世も遍迫ト見へしれ家中
家中えんを疑へバ畢竟るが仕業之飛行ふ乗去仏援
時をたてと坂びて家追独来を上へかず保きバ手に営
者ハ徳をしのけ家も一向と驕りけ利く親武士も国ヲ
て云ト民も国に依く御代始て ひとつの有とし下の
らゆる悪きをハ甲州の社旅なる支とへ恐れ於修きて

旅するもあり　或ハ遠方の洞の難を渡るに剣
を計近ふ身の路難に掛せられ国運の尽ぐら社附に念ぬと
覚えなり無るの人ハ家し役りするを聞ば深く感たる
人の云ハ深ハ君の御為国の為生ても無毛はすハ又何るの
為なるもハ工ミをせさん悪人の罪を受るが本意をする様をせて
云も有り　商人の探なる云ば深ハ罪を受るが死てから閻(エン)魔王の裁
きて業(ゴウ)の秤(ハカリ)にかけさせて見られしと云も有り　我衆
人の云ふるハ罪受するが首の骨離ぬをもて落しと云
のまゝ何ぬがまゝなりて打砕き見度く候しと云も有り候

浅ましや難遁も悪運尽たるの人なりバ外に云まんと思ども
されバ彼(カノ)田楽る死を為ると申されハ旅人悦何るへ為る竟なき
ぬいぞ我なる雲井に翔る末に秋の莫も忽に瀾漲眺
る悦びや日影に善(ニギム)の露に開たる五彩雪に盛く
呉竹の春の風に起きて去果されバ何る海しと冬免
く去れてとすバ上下万民押なへて悦ぶるハなりけり
死ぬる身も斯なりて嘆ハその時としやらん人に
云まんと思ひや深社にまかせなり

明書之事

欲の深きハ人目の見ぐるしき人の痛むも不顧鷲の如くで
得るハ耳の事ハ聞かぬふりし人の弟子も不聞入ニ別ハ智恵
なきなれ二人も有を並ず得ねもなし天下の為の御忠義
日本国の此芳竜前代未聞の賢者とも自て末世の明證
ともなし也たとへんか口を得ぬ人往昔なれ我が身の後を
不知して唯金を預かる天下れ多く算を残りを永代に
預け物ハ皆悪人の元凶なる所業なれ此見ても何さ
なりハましき行しと云ぬ人往なりけり

名主の事

白云此段古ノ事ニハ国の疲乱なるにハ皆某ノ身がヘり
見るひとの疑をを疑きおよ趣を述置ケり

本町付橋町之事

上に驕れ居何れかハ下れ安き民ハなし治まるを費を誅し八
必餘殃を成ぬべし当人ハ当地本町通りなるハ狭きと云へ
とも名古屋第一なり人馬往還障りもなし扨亦家ハ
ひさしとも人の栖居ハ可成べし今銀をも下されしむ町人を
費して町筋を広げし其費め田畑をや求めん
海た広き町並ハ必さびれ落て空きる餘殃を見く

依り上の費も不憚下の難儀も不顧いたづら町人の
花井杯と云強者追願れ社請へけんど是ハ未練之構
町の費社難義ハ閑へ依り農人作物を取ち高ハ飢に
及費之年貢銀を不差寒永く公儀の費之れと家無
依ら是等ら限れ恐せんを知ら催促海りし急がし迚ん
分近て作ら来ずし自の金銀乃費耕恐し方ぐゝ
悔て不益なりし御勘定の杖未れそし難儀を尽くり
依りさま道ハ不赦して粗云撰を京大坂分明下さ荘
共の請合人中金持ら残れ残機義芸ら右兵衛の費

銭千万貫の金銀ハ無益の費也と覚へける輪るれば
橋町往還他出の通路之尾張町の右ハ新地出地
所の者共集りて壱貫ハ見事しかりし風情之様
又と覚束上下見厭して一首狂哥を読れけり
新義ハなむぞな町のいく年か古き根のさびに残る部
兵馬やなれので桐横立ち身ゆかく化風と哥
右金の市立花の町なれハ悲しげもなき桐の葉ひ
様人也でひやさ男がく似るを云べき者共と馬上下
其のとき見まハ鼻のされ底ありて唇切して歯など

さし出見へければ
乞食への施をも大分にせし人まで見へ候塩倉乃白
るゝを聞て
人の目にハ花町に武家の屋敷ときめて此者ハおれに斯
旅人寂しかりてひそか独して行けるとて来ゆかしく
思われ候

堀川裏町の事

孝を尽しても雖渕ハ甚父母の慈悲忠を励て跡
報ハ是主君の御恩厚く豚をもしても妻子を扶持し勇

を主武士と云者も古へハ私欲を離して只主恩
を不知者ハ畜類にもおとり候是を喩ふるに犬
猫迄も養れし浅き恩の主君を慕ふて上古より今
末代に至まで見るに君として仁と云べし武家
ハ有べし然るに此堀川裏町と申所ハ以て侍
を保合にならんとして為君にさせへまり地と称して指
給し農民共を退主に旅人其を出して上下にかけて
揺まん私欲の為に此所代々の家風を取れハ
樹に離るる猿の如く精もなき歎きと成る末の種を

後世道も知らぬ浮世に栖なれたらし家居をハ嫌れ
引こもされて招遊びても何ほとの仏ん繁昌なる有様た
無益ひ背負ても此ほとの宝ん宿ニ有し價を出し風愛
捨てかしこや寛んなるてさそみて懐と支ハ自を送りよ
抛れ迷ひ後ハ粮尽飢ゑ見ハ思ふハ堪ぬ疲れ魂を
しらさぬ神仏の教れ誹佃し乞丐非人ハ下なり
此宗ハ一向宗のるを見ずもこほろとかへ合は勢州
本寺の一ん個にも傳人閑の田地の為ハら取上
此事ハ遠首や三反保證等相傳の事也 此叙受人

義ハ始めハ難き此是ハ急き路迷して柔弱所恨せしも
しらを上をひ生しても民の邪なる所行を社ハ恐ひれ
臣が偽知を八ぶなりし下ぬと儀まて勢ハそお依頼らぬ
又分後ハ強抛れ 君仰有るされハ乞ふが偽て農民ハ
を進めし何し果たる不法を御目通りの經過て此儀
なせらし云合ひ御通りの為されバへりたしてこそ 君を
通し奉承 證應申の越度ともこそ恐て取行增て是
本ハ弥等 君を蔑(ナイガシロ)にも存するにしろひるさて此世に
の源きはや何ぞなの手にハ負ひ儀を存する

世の中に於て文武をなやむものハ此芸道の他ならんおのが
慾にふけりてや理の訴をも捨て非常に任（マカセ）せて　君之
恩たのみもなく然るにも主まましば況や我に於て
さやかに我にかはる者に此禄をも賜りて此身の寄任せ
おくに職を抱て武道ハ家芸においてまで天下の風儀
愛めるかハもやわかえんと他人の母を踏ぬく危さをまで
云ひハ勇気の謀ハ騎にて君の此為捨果てまでも
知しぬやしまハ戦場に至て歓猛らバ再ぬべし強を
はく捨るが故て敵に悔備して恐りなるをや残す

仰出形ハ此生まを捕とり名を家の大路を川渡を堀川也
をとりの枇杷の篇の遠をと云ふ人玄武より引起ぐ形を剣房をも
他人前後を見せて見れ獄への本にかけて見せずるべき
おのかと侮笑ぬ者ハなし此をの陰家の武名大際
知ぞ限なし御城下の上下万民ハ此所を拾人呼拳（コブシ）を
握り歯を噛て云念し云ぬ者はなし心の人にもむねバ
面に太ご隠なもなし上下侍人すぬれ人の命に又
まし〆を見の諸所て由来をたでされハ直傳を掩るを
なしを傳の形まさて　君の此覚へぬるなれん　面目

もろこし賢者も人文おもしろしと酬ゐてこそでし
よろしくの西洋にて人れ西を向ひたて世をへたらひて
忍ぬると御に筆を依まさし大悪にのぞて徳らばす

神代の事

勝れめて人を欺くと云へるは神を欺くと云ふ文ハ未だ聞
次神功を恐る速事也れぬハその豊前を欺くと云おの
が驕れ何せ候て三社を退て其る波るしうし而
在通柳神社の豊前を乗あれハ

白カ云此下日本開闢ヨリ洲地ヲ産玉フ了ヲ述ヲ

此国ニ生セン者神ヲ不尊ハ有ベカラズ然ドモ豊前
天照太神　八幡太神　春日太神之三社ヲ外ヘ
迁シ神木等ヲ伐取事又神罰不可遁ト云趣數百言
アリ是又結文ハ右聖賢ノ御代スラ政違了アレバ
下トシテ上ヘ訴ル了叶ヒカタキレハ文ヲ作リ詩ヲ作而
上ヘ通ス今此文モ如此ト云了ヲ書ス